Hokuen

# 北縁

長野・松本城

# 年頭所感

お檀家の皆さまには、いつも当山の護持・運営に深いご理解とご尽力を賜り、新年にあたり厚く感謝申し上げます。

また、昨年12月に開園した啓明ともいき保育園には色々とご協力賜り誠にありがとうございます。

今年は別項の通りお寺外回りの大規模改修と4月には長野への団体参拝旅行と変化に富んだ一年となりそうです。旅行には多くのご参加をお待ちしております。

そしてまた徳川家康公の400回忌に当たります。家康公は、芝の増上寺（東京）を徳川家の菩提所と定めたり、知恩院（京都）の造営に着手したりと、浄土宗と大変縁があります。また、自筆のお名号などから、ご自身もお念仏申す人であったことが、偲ばれます。この400回忌とは、一個人のお弔い、その方の偉業を讃えるというだけの性質を持った行事でしょうか。そこには、一個人を越えた普遍的な真理・真実があればこそ、400回忌の本当の意味があるように感じます。

戦国の世から江戸の世を生きた家康公に、現代を生きる私たちが“今、いかに生きるべきか”問われているように思います。

年頭にあたり、皆様方のご健勝を祈念いたしまして、新年の挨拶とさせていただきます。

住職　太田　眞琴

前列左より　松尾一志（まつおいつし）　太田真海（おおたしんかい）（副住職）　太田眞琴（おおたしんきん）（住職）　太田光顯（おおたこうけん）（別院主管）　野崎幸史（のざきこうし）

後列左より　石川享信（いしかわこうしん）　宗川信章（そうかわしんしょう）　堀内和紀（ほりうちかずき）　駒木根琴生（こまきねきんしょう）　立花俊輔（たちばなしゅんぷ）　石山祐道（いしやまゆうどう）

お知らせ

# 新善光寺外部改修工事について

新善光寺ではお寺の外部（本堂の外側・塀など）の大規模改修工事を本年の4月からすることにいたしました。

遠くから見る限りではよくわかりませんが、30年余の経過で本堂の正面階段のひび割れ・基礎部分の欠損・手すりの欠損・塗装の劣化など至るところに傷んでいる部分が見受けられます。そこで責任役員会を開き、今後の寺院運営を見据え、工事をする旨が決定されました。本堂の色合いはそのままで、塀の部分はどのようにするか検討中であります。

お寺にお参りに来られるお檀家様にはご不便をおかけすることがあるかと思いますが、どうかご理解の程、宜しくお願いします。

**工事期間は以下の通りです。**

**平成27年4月1日～7月20日**

## 〈団体参拝旅行へのお誘い〉 宿坊に泊まる長野･善光寺ご開帳の旅

**平成 27 年 4 月 21 日（火）～ 23 日（木）2 泊 3 日**

旅行まであと少しとなってきました。申込者もおかげさまで増えてきており、定員まであとわずかとなってきました。まだ、どうしようか迷っている方もおられるかもしれません。そこで 12 月に実際に下見に行ってきて同じコースを回ってきましたので今回の記事では旅行の見どころを写真や感想も交えて紹介したいと思います。

### 〈初日〉

弥彦神社

まずは新千歳空港から新潟空港へ。そして新潟市内で昼食をとり、弥彦神社へ向かいます。ちょうど来年遷座 100 年ということで境内では整備事業が進んでおります。由緒ある非常に大きな神社です。お参りをしてお土産屋にも寄り、次は長野へと向かいます。

宿坊に到着しました。宿坊の名前は兄部坊（このこんぼう）です。失礼ながら想像していたより立派です。そして善光寺は目の前です。ちょうど夜 6 時頃に着きましたので夜ご飯をいただきました。全て精進料理です、盛りつけにも丁寧な仕事が見受けられます。お腹一杯になり、その後は食後の運動も兼ねて善光寺に行ってきました。夜の善光寺は何か神秘的でキレイでした。ご開帳時は特別にライトアップもあるようです。翌朝は早いため、早めに就寝です。

宿坊・兄部坊

宿坊の中

宿坊の精進料理

夜の善光寺

### 〈2 日目〉

善光寺大本願

朝 6 時半からのお朝事に参加するため早めに起床です。身支度を調え宿坊専属案内人と共に移動です。まず善光寺大本願に行きました、次は本堂に向かいます。山門をくぐり大きな本堂が見えます。善光寺は天台宗と浄土宗により護られているお寺です。まずは天台宗のお参りで、次に浄土宗のお参りです。その間にはお戒壇めぐりやお数珠頂戴もあります。

※お戒壇巡り…お戒壇めぐりをすることで、**極楽浄土が約束される**と言われています。瑠璃檀下の真っ暗な回廊をめぐり、ご本尊の下にかかる極楽の錠前に触れて、ご本尊と結縁を果たすための道場であるとされます。（回廊の中は本当に真っ暗闇で何も見えません）

※お数珠頂戴…本堂でのお朝事、日中法要などで御出仕の行き帰りに参道でひざまずき、お上人から直接頭を数珠でなでて頂くことにより、善光寺如来様との仏縁をさらに深めさせて頂くものです。

善光寺の参道

お朝事の後、宿坊に戻り朝食を頂きチェックアウトです。おみやげ（七味唐辛子）も買って移動です。大王わさび農場、そして国宝松本城を巡ります。わさび農場はわさびだらけでした。またお土産店には「わさびちゃんベアー」なるぬいぐるみがありました。

わさび農場、見渡す限りわさび！

松本城、同行者の高瀬上人と

ぬのはん、受付

夕方、宿泊地の上諏訪に到着です。お宿は「ぬのはん」さん。大変立派な由緒あるお宿でした。温泉に浸かり気分もリフレッシュ、気持ちよいです。そして夕食、4月では大広間での宴会を予定しています。夜は諏訪湖のほとりを歩きました、ムード抜群です。

〈3日目〉

チェックアウト後、甲府へ移動です。まず甲斐善光寺、こちらも浄土宗寺院です。開基は武田信玄公、川中島の合戦の折、信濃善光寺の焼失を恐れ、ご本尊はじめ諸仏寺宝類を遷したことに始まります。重要文化財の仏像もあり、じっくり見入りました。ここにもお戒壇巡りがありました。金堂の天井に龍が描かれており、その下で手をたたくと鳴き声らしき音が響きます、これは日本一の鳴き龍といわれています。ご開帳は全部で6つの善光寺で行われており、全て同じ期間（4月5日～5月31日迄）です。

立派な山門の甲斐善光寺

お参りの後は昇仙峡そしてワイナリーです。昇仙峡は渓谷で特別名勝にも指定されています。ロープウェイに乗って絶景を見てきました。富士山も見ることができます。ワイナリーは工場見学そして試飲もできました。フレッシュで飲みやすいかんじがしました。

昇仙峡からのながめ

ワイナリーの工場見学

実際に行ってみると盛り沢山の内容のコースだと思いました。景色もキレイですし、お寺も立派です。ご開帳は7年に一度となかなか無い機会だと思いますので、皆様どうかご参加をお待ちしております。尚ご不明な点やご質問はお気軽にお尋ねください。

また、1泊目の宿坊はちょっとという方はホテルに泊まるということもできますし、そのほかにも柔軟に対応していきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

新善光寺のブログにも今回の下見旅行のことを詳しく載せてあります。どうぞ、そちらもご覧になってください。

**ご旅行代金　99,000円**

（2名1室3名1室ご指定の場合は別途追加料金がかかります）

**最終申込日3月20日まで**

（お早めにお申し込みください）

お問い合わせ先　℡ 011-511-0262（副住職まで）
E-mail：s-zenkoj@crux.ocn.ne.jp

# お参りの種類

## 「月参りとは」

供養と一口に言いましても、様々な供養の仕方があるかと思います。お寺やお墓に行ってお参りする又、月の決まった日にご自宅へ僧侶を呼んでお仏壇の前で供養するなどです。このご自宅へのお参りのことを月参りといいます。

昨今はご家庭やお仕事の都合・時代の流れなどで昔と比べると減っているといった現状です。また、新しくお檀家様になられた方はどういったものだろうと思う方もおられると思います。そこで今回はこの月参りに焦点を当てて実際に月参りに伺っているお檀家様の話も交えて紹介したいと思います。

月参りとは、ひと月の決まった日（ご命日）にお檀家様のご自宅に伺ってお仏壇の前で読経して故人様を回向することです。例えば１日に亡くなられている方は毎月１日や隔月１日といった具合です。又、お参りが終わった後はテーブルに場所を移したりして色々なお話しをさせていただくこともありまして、お寺としましてはお檀家様との貴重なつながりの場でもあると考えております。

自宅での月参りの様子（例）

ここで毎月伺っているお檀家様のお話を紹介させていただきます。

「私は実家が浄土宗ではない別の宗派だったのですが、昔から家族揃って仏壇の前に座り一緒にお経を唱えていました。そして嫁いだ先の菩提寺が新善光寺でした。義母から聞いた話では自宅には松尾さんがまだお寺に入りたての頃から先代住職のお付きで来ていたようです。また、賢明さん（現・大松寺住職）にもよく来ていただきまして、お経のあとは色々と話を聞いたり、また息子のことを可愛がってくれていました。

知り合いと話をしてみると“よく毎月なんて”と言われたりもしますが、

別に苦に思ったことはありません。子供の頃から仏壇の前に座るというのが習慣になっていて、それが体に染みついているからでしょうか。今でも実家の宗派のお経は唱えることができますし、今は浄土宗のお経を後ろから一緒に唱えています。

ある日、おりく膳（ご霊膳）を作るのはどうかなと悩んだことがありましたが、どうしようか悩むなら作って悩まない方が良いと思い、それ以降は全く悩まなくなりました。お参りは強制されてするものではないと思いますし、そうでなければ続けていけるものではないと思っています。

長年お参りしていますけれども、今でもわからないことだらけです。寺報は参考になっていますし、お参りの後にお坊さんとお話しして初めて教わることもあります。ご先祖様がいて自分がいる、それを守りたい、それが自分の責任だと考え今生きている間は月参りは続けていこうと思っております。」

月参りは亡くなった方やご先祖様と向き合う日ではないでしょうか。毎月ではなく隔月・命日前の土日、また思い立った月でもよろしいかと思います。また納骨堂をお持ちの方は納骨壇の前で、そうでない方はお寺の部屋でもご供養することができます。

もし、ご希望の方がおられれば、お寺まで電話やメールでご連絡いただければと思います。ご希望の時間にも沿えるようにしたいとも思っております。

納骨壇前でのお参り

部屋でのお参り

# 真実との出会い　～浄土の法門と遊蓮房～

一生のうちで忘れられない出会いというものが、誰にでもあるのではないでしょうか。法然上人（1133～1212）は、「浄土の法門と遊蓮房」に出会えたことこそ、人としてこの世に生を受けた思い出です、と常に仰っておられたと伝えられています。法然上人が、一生の思い出とした浄土の法門と遊蓮房とは、どのようなことなのでしょうか。今回は、この二つの出会いを通して、私たちが本当の幸せに到る過程をさぐってみたいと思います。

遊蓮房の往生（法然上人45歳、遊蓮房39歳、ひとときの別れ）

さて、出会いというと一般的には、人と人の関わりを言います。遊蓮房（1139～1177）は、円照という冬でも汗をかくほど懸命にお念仏を称えるお坊さまですが、浄土の法門は、人物ではありません。浄土の法門とは、苦しむ自分・悲しむ自分をそっくりそのまま受け止めてくれる大地であるお浄土に、南無阿弥陀仏と称えることによって導いてくださるという教えのことです。なぜ、人物ではない浄土の法門を法然上人は、“出会えた”と仰ったのでしょうか。その表現には、この二つに出会った以前の法然上人の苦悩があると拝察いたします。

法然上人は、9歳の時、父を失い、身分を公にできず、15歳で比叡山に登り出家します。それから、若き僧であった法然上人は、『四教義』という難解な書物の昔から議論されている箇所をするどくお師匠様に質問するなどの秀才ぶりから、周りの人からは、天才だの、比叡山のトップに立てる器だのと持てはやされました。しかし、ご自身の心は暗く閉ざされていくのみでした。9歳の時の心の傷が、今もなお疼くのでした。政治的な争いから、法然上人の家は、政敵に襲撃され、その際父は命を落とします。人が人を傷つけ合う惨状を目の当たりにした幼き法然上人は、人の心の怨みや愛憎・嫉妬という闇をも見てしまったのではないでしょうか。さらに、その闇はまぎれもなく自身の中にもあることをまざまざと感じられたのではないかと思います。漆黒の闇の中を、法然上人はもがきながら、嘆きながら、お釈迦さまの教えと必死に向き合いました。そして、ついに43歳の春、浄土の法門（教え）に出会われたのです。その時の感慨を法然上人は、「深くたましいに染み、心にとどめたるなり」としみじみと語っておられます。そこに、筆舌に尽くしがたい感動があったからこそ、人格ではない浄土の法門をまるでかけがえのない人に会ったかのように表現されたのではないでしょうか。

春の暖かな日射しが雪を解かすように、浄土の法門（教え）が法然上人の心をやさしく解き放っていくのでした。その浄土の法門の実践者であり、体得者である遊蓮房に会うために、法然上人は比叡山を下りたとも言われています。中島みゆきさんの歌に、「縦の糸はあなた　横の糸は私　逢うべき糸に出逢えることを　人は仕合わせと呼びます」とあります。まさに、法然上人と遊蓮房は、互いに浄土の法門を喜び合う“逢うべき糸”であったと感じます。お二人が今生で共に過ごしたのは二年程ですが、たとえ短い時間であっても、真実を見いだせる出会いは、人生に深みを与えてくれます。私たちも、そんな出会いを大切にしてゆきたいものです。

（文：立花　俊輔）

ズッコケ尼さんの仏教こぼれ話⑨

# 〈弥陀と共に初詣〉

駒木根　琴生

新しい年が明けた。「一」と「止まる」と書く「正」には、一つの事に徹するという意味がある。人は誰しもこだわりの一つを持っているだろう。仏教修行には、写経や座禅、寺院巡り等の諸行がある。私達、浄土宗信徒は、阿弥陀仏を仰ぎ手を合わせて、念仏一行に専念しなければならない。年の初めの「正」である。

また、僧侶は、先祖供養と同時に法（仏様の教説）を正しく伝える責務がある。幸い私は、布教の為の養成講座修了後、総・大本山布教師にさせて頂いた。よく布教道は、地獄道と云われている。浄土宗の三つの要、求める所は西方極楽浄土であること、次に帰る所は阿弥陀仏の所、その為には臨終のその日迄お念仏申し続けることの大切さを伝えなければならない。その後には、必ず阿弥陀仏のお迎えを頂き、亡き人々の浄土再会も忘れずに伝えたい。それは、亡き長男の共に法の座で会える同一蓮を信じて、楽しみにしている母の確信からである。

ここに「その時は　さてもそうかと　思いしに　その場を立てば　跡形もなし」つまり、聞いている時には解り易くて良い話だと頷く、しかし、いざ終わってその場を立つと、記憶は薄れて、更に帰路に着く頃には忘れてしまうという戯れ歌がある。これでは困る。時間を割いて参拝下さった皆さんに、教えの一つでも解って頂かなければならない。お一人ずつの機根や素質に適した教えを伝える対機説法の理想を果たすとなると尚、難しい。ズッコケ尼の私の器量では、太刀打ち出来ない。こんな時こそ、「ほとけだのみ」阿弥陀仏の助けを求める。皆さんも体験あると思うが、法話の前に布教師の同称十念の合図で阿弥陀さまの名前を呼ぶ。「南無阿弥陀仏　どうぞ助けて下さい」の声に乗じて、本願他力に被われる。すると、悪しき壁は払われて、毛穴の一本からでさえ、法が入ってくれる。その力のお陰で念仏功徳のおみやげを持ち帰って頂ける。

仏陀入滅後、長い月日が経った末法の今、私達の自力では悟ることも、浄土往生もかなわない。その点を案じて、法然上人は多くの御法語を残して下さった。『一紙小消息』の此の世に人間として生まれる難さ、次に罪深い私達の会い難き本願の出会い、やがて離れ難き迷いの此の世を離れて、最後に生まれ難き浄土に往生させて頂けるこの上ない悦びの教えもその一つである。末法の世に間に合った。有難い。

苦難の末に届けてくれた法然上人に感謝して、御遺訓「只一向に念仏すべし」を実行する一年であるように望む。

“別れても　大悲のみ親　あらわれて　南無阿弥陀仏　それ今ここに”

シリーズ 仏事のおはなし

## お勤めのはなし ❻

今回からは、いよいよお勤め（勤行）の要（かなめ）の部分にあたる「本分」に入っていきます。

本分は「正宗分（しょうじゅうぶん）」ともいい、「宗」とは「心の在り方」いう意味があります。ですから「心の正しいあり方を示す箇所」という意味になるわけです。具体的には「お勤めの中で教えの根拠となる、経典を読み、浄土宗のみ教えの根幹であるお念仏をお唱えする」という部分になります。

今まででお話ししてきた事の復習になりますが、「経典（お経）」はお釈迦様のお言葉であり、そのお経で説かれるみ教えを我々が信仰、実践していく事が仏道修行となります。お経を読んだ後は、「次第（勤行のプログラム）」にあるように祖師のお言葉である「御法語（ごほうご）」というものを読みます（今回お話しを予定しているのは、法然上人のご遺訓「一枚起請文」です）。御法語はお釈迦様のお言葉ではありませんが、祖師がお釈迦様のお言葉を解釈し、後世の我々の為に分かりやすい言葉で残してくれたものです。

そして、お念仏を実践する部分に入っていきます。浄土宗は「お念仏の教義」ですので、様々ある実践項目の中でも特に「お念仏を声に出してお唱えする（口称念仏）」ことが最も大切なお作法として位置付けされています。その為、次第の中にも幾度となくお念仏をお唱えする「念仏一会（ねんぶついちえ）」が組み込まれています。最後にお念仏の功徳を手向けていくという「総回向偈」という偈文で締めくくっています。

それではひとつひとつの偈文などをひも解いていきましょう。

### ・開経偈

読んで字の如く、経典ひも解くという意味の偈文です。お勤めの本論である正宗分でお釈迦様のお言葉である、「お経」を読むためにとなえるのです。

偈文、並びに読むときの鈴の打つ位置を図１に示します。

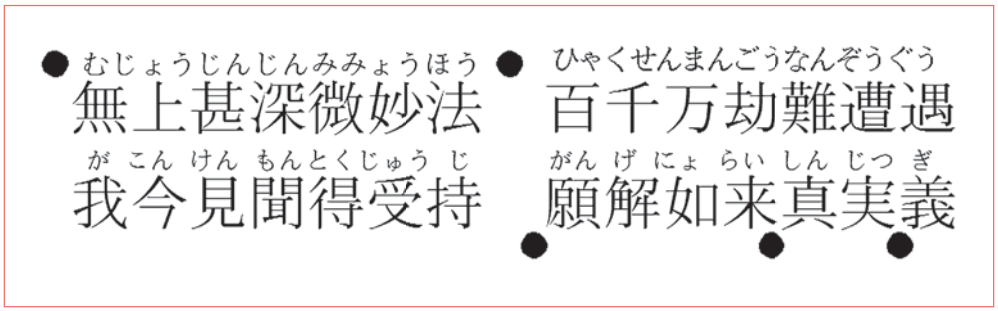



図１

●：お鈴の打つ場所を指します。

「無上甚深微妙の法は　百千万劫にも遭い遇うこと難し　我れ今見聞し受持することを得たり　願わくは如来の真実義を解したてまつらん」

（意訳：この上なく奥深いみ仏のみ教え（法）は、百千万劫（劫：三年（諸説あり）に一度、天より天女が下界に舞い降り、大きな岩を羽衣でこすり、その岩が擦り切れてなくなるまでの時間が一劫。途方もない時間であるという比喩）というとてつもない時間を経ても出遇うことが難しい。しかし、私は今幸いにもその教えを見聞し、受け取らせて頂ける機会を得た。願わくはみ仏のみ教えを正しく体得させて頂けますように。）

なかなか出遇うことの出来ないみ仏のみ教えに出遇えたことの感動とそのみ教えを自らのものに出来るように願う。そのような内容になっています。

仏教には六道輪廻という世界観がありますが、これは「天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道」という六つの世界を常に生まれ変わり続けるという世界観です。その中の「人間」の世界に私たちは命をいただき、人生というものを全うしていくのです。ところが、この「人として生を受ける」というのがとても難しいといわれています。

法然上人は「天から糸を垂らし、たまたま海底に落ちていた針の穴にその糸が通る位難しい」とおっしゃっていますし、科学的にも「人として生まれてくる確率は、1億円の宝くじに100万回連続して当たったのと同じ奇跡。」（村上和雄筑波大学名誉教授）とおっしゃる先生がおられます。

そんな稀有な人としての命を頂き、この迷いの世界を輪廻する事を離れる仏法（み仏のみ教え）を見聞する機会を得たことは大変素晴らしいということになります。そんな気持ちで読むのがこの「開経偈」という偈文です。

## ・誦経

さて、開経偈を読んだら、いよいよ経典を読誦します。お釈迦様の残されたお経は「八万四千」とよばれるほど多種多様でとてもたくさんあります。総じて「一切経」とか「大蔵経」と呼ばれますが、巻物にして何千巻という数があります。法然上人はこれを五度お読みになったと伝えられております。

これも前回までにお話しいたしましたが、浄土宗はこのうち「浄土三部経」というのが教義の所依経典（教えの拠り所となるお経）ですので、ここではこの浄土三部経を読むことになります。

しかし、一度のお勤めでこれを全て読むとなるととてつもない時間がかかります。そこで、通常はその三部経より抜粋したものを読みます。

檀信徒用に販売されている経本には「四誓偈（しせいげ）」や「真身観文（しんじんがんもん）（仏身観文（ぶっしんがんもん）ともいいます）」が記載されています。「四誓偈」は「仏説無量寿経」の一部であり、「真身観文」は「仏説観無量寿経」の一部になります。

また、三部経には「仏説阿弥陀経（ぶっせつあみだきょう）」という他の二つの経典よりは短いお経があります（その為、阿弥陀経のことを「小経（しょうきょう）」と呼ぶこともあります）。この阿弥陀経も信徒用経本に載せていることが多いので、ご先祖の祥月や特別なご縁日のご供養の為にお読みになってもよろしいかと思います。各経典に「仏説」と付いているのは、「仏（＝釈迦）」が説いた教えという意味になります。

次回は実際中身をひも解いていきます。

【新善光寺物語⑨】

# 二度目の五重相伝会開催

前回は本堂再建と檀信徒教化の為、昭和 28 年に浄土宗の重要な儀式「五重相伝会」が行われたことについて書きましたが、その後昭和 39 年に本堂の再建が果たせました。また後にも鐘楼堂や第二納骨堂など続々と新善光寺の整備が進んでいきました。そして昭和 56 年、新善光寺は創建 100 年を迎え記念事業として客殿明照殿（下図を参照）を完成させました。

この明照殿の完成は、地域社会との交流を深めることにつながり、お寺の開放として、市民に大いに歓迎されたようです。お檀家様の中には葬儀会場や法事の後席会場として使われた方もおられるかもしれません。昨年 10 月に開催されました「鴨々川ノスタルジア」では“札幌芸者衆の踊りを見る会”“切り絵・活版印刷・墨絵のワークショップ”の会場としても使用されました。また、お坊さんの研修会や婦人会でも使われております。

これにより長年にわたって進めてきた新善光寺の伽藍が完成し、28 年ぶりに五重相伝会を開催しました。この法会は大本山増上寺・藤井実応台下ご親修のもと、盛大に執り行われました。

寺内地図・黄色い部分が明照殿

鴨々川ノスタルジアで

研修会で

婦人会の新年会で

ここで五重相伝について説明したいと思います。

五重相伝とは

浄土宗のお念仏の教えを五つの段階に分けて伝える法会です。通常は五日間にわたり勧誡（法話を聞くこと）と勤行を繰り返しながらお念仏の教義を学び、最後に伝法道場が開かれ、伝燈仏子（通例はそのお寺の住職）が受者へ浄土宗の奥義をお伝えします。

「五重相伝」の「重」は、「重要」と「重ねる」の二意があり、初重から五重という順序にしたがい「機→法（行）→解→証→お十念」の流れで法会が進められます。この相伝を受けた方は真の仏弟子となったとし、「お血脈」と呼ばれる伝巻をご本山から授与されます。また、五重相伝を受けずに往生されたご先祖へ「贈五重」と称して、この法会の中で亡き人への功徳を手向ける儀礼も行います。

昭和56年に開かれた五重相伝会はそれはそれは沢山のお檀家様が受けられたことが写真からも見受けられます。

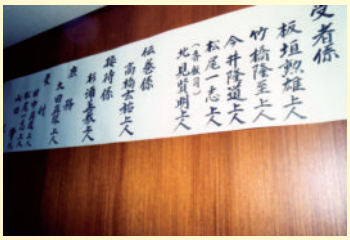
これにより、先代住職が取り組んできた新善光寺の再興が果たされたといっても過言ではないでしょうか。そして次は念願の山門の完成へと進んでいくのでした。

余談ですが、およそ30年毎にこの五重相伝会は行われていることになりますから、近い将来に宮の沢別院で執り行うという計画がまことしやかに進んでおります。

伝巻を受け取る様子

先代住職（中央）

先代住職の弟（右）


なつかしい名前も

集合写真

— お檀家タウンページ ～ともいき訪問⑤ —

# 東寿し

今回伺ったのはお寺から歩くこと数分のところにあります、老舗寿司店「東寿し」様です。

明治８年、北海道の地に初めて寿司屋ののれんを揚げられました。当時の屋号は「東壽司」。創業者が東京から北海道にお寿司を伝えたことから「東から寿しを司る」＝「東壽司」と名付けられたと伝えられています。以来 140 年余も営業を続けられ北海道最古の寿司屋として北海道の開拓や発展と共に歩まれ、現在は七代目の冨永裕美様が経営されています。

つい見とれてしまう握り方でした

ランチは 850 円からで近隣のサラリーマンで賑わっています。夜は宴会や家族連れ、また場所柄で飲みに行った後のお土産にと様々なシチュエーションで使われているようです。

７代目の冨永裕美様

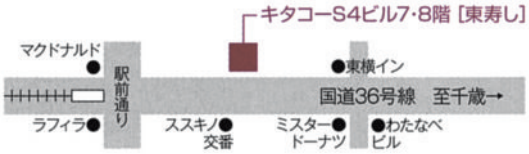
今回は７階のカウンターで取材をさせていただきました。お酒は道内の日本酒が豊富に揃えられています。一つひとつ丁寧なお仕事で思わず見とれてしまいました。この冬の時期は真タチや貝類などが食べ頃だということです。また、サイドメニューも豊富でお子様連れでも楽しめそうです。

お寺でのお参りの後に立ち寄り、美味しいお寿司と共にご家族団らんの時間を過ごすといったご利用はいかがでしょうか。ご法事の後席にも利用できるように各種プランがあります。

握り寿し
「北のにぎり」

創業当時の様子

寿しケーキも
あります




創業 明治8年 東寿

〒 064-0804
札幌市中央区南４条西３丁目　キタコー S４ビル７･8階
電話／（011）261-7161（代表）
E-mail ／ azumazushi@azumazushi.com
URL ／ http://www.azumazushi.com
11:00 ～ 23:00（ラストオーダー／ 22:30）／年中無休

## 職員を紹介します

そうかわ　しんしょう
# 宗川　信章

昭和 39 年 10 月 1 日

先代住職とお檀家様の法事にて
（平成 2 年）

1987 年から新善光寺の法務に従事しましたので、あと 3 年で勤続 30 年になろうとしています。子供の頃からの自分を振り返ると、こんなにも長く勤務できた事が信じられない気持ちです。なぜなら、内向的な性格と容姿に恵まれなかったため、人前で行動するという事が大変苦手でありましたので、大勢の人々の前でお経を唱えたり、お話しをする僧侶には向いていないと思っていたからです。

ご縁をいただいて勤務してからも、本当につとまるのか不安でいっぱいでありました。しかし、先代住職の太田隆賢師、そして太田眞琴現住職、それから諸先輩方のあたたかな指導の下少しずつですが、法務にも慣れていくことが出来ました。本当に感謝しています。

人と会話をするのも得意ではなかったため、お檀家様へのお参りに伺って、お話ができるのかも不安でありました。皆様も随分と陰気な僧侶が入ったなと思われたのではないかと思います。それでも、なんとか皆様に不快なお気持ちを抱かれないようにと、自分なりに心がけてはいたつもりです。ご供養に伺う日々を積み重ねていき、お檀家様とお話をしていく中で、段々と会話をするのに苦手意識が薄れ、お話しをするのが楽しみになっていきました。本当に皆様のあたたかな支えの賜物だと感謝しています。

小学 2 年生の時から人は必ず死を迎えるということを強く意識しはじめました。どんなに楽しい時を過ごしたり、充実した人生をおくったとしても必ず死がおとずれ、別れていかなければならないという現実に子どもながらも深く悩みました。成長していく中でも深層に意識したままでしたので、年を重ねていくと、どうなってしまうのだろうかと考えていました。命があり、時を刻んで、生命を終える。当たり前の事ながら、簡単に受容できない自分がありました。

テレビ取材でインタビューを受ける

しかし、法務に従事するうちに、お念仏の功徳を大切にするとともに、時の流れの中で戻ることのない現在・瞬間を、出会った人々とどのように過ごせばいいのかを問い続ける事が大事なのではと思うようになっていきました。今後もその気持ちを継続していければと願っています。

# 《宮の沢別院から》

## どんりゅう上人伝③「曇竜　江戸増上寺へ入山」

1570年、15歳になろうとする春、曇竜（呑龍上人の修行僧の頃の名）はお師匠様の推薦状を懐に、一路江戸の増上寺へと向かいました。曇竜は学問の中心地で将来への大きな一歩を踏み出すことになったのです。

増上寺は江戸貝塚、今の東京千代田区平川町周辺にあり、学問所として広く名が知られ、各地から推薦された僧たちがあつまり、競うように勉学修行していました。曇竜はここで29歳になるまでの14年間、厳しくも充実した研鑽の日々を送りました。この間、22歳の時には五重相伝という浄土宗の教えを正式に継承する儀礼をうけます。この若さで五重相伝の口伝を授けられることは大変珍しく、いかに曇竜上人が優れた僧侶として認められていたかが分かります。

この頃の増上寺の法主は源誉存応（げんよぞんのう）上人という方でした。存応上人は、のちの天下人徳川家康公が心から信頼し、現在増上寺に徳川将軍のお墓が祀られている伝統を作った人物であります。今に至る増上寺と徳川家の関係が存応上人・徳川家康公の二人から始まったのです。

〈行事報告〉

新年の1月2日に修正会並びに新年祈願法要をおこないました。当日は多くの皆様がお参りに来られ、今年が良い年になるようにと思いを込められていました。また、法要が終わった後には餅つきも行いました。

宮の沢別院にも納骨壇はございます。お気軽にお問い合わせください。

**TEL 011-668-5110**

札幌市手稲区西宮の沢5条1丁目19-35

慈啓会から

# “啓明ともいき保育園開園しました”

啓明ともいき保育園

このたび、社会福祉法人札幌慈啓会では、待機児童の解消のため札幌市の基準に沿った安全で安心できる保育園の整備を進めておりましたが、このたび平成26年12月1日に無事に開園することができました。場所は札幌市中央区南14条西18丁目です。

お檀家様におかれましては、おもちゃや絵本や紙芝居、そしておひな様など様々なものをご寄贈頂きまして大変感謝しております。

「ともいき」とは共生と書きまして札幌慈啓会の理念でありますが、元々は浄土宗の大本山増上寺法主の椎尾弁匡師の言葉であります。地域・自然といった横のつながりだけでなく、「いのちのつながり」いうなれば縦のつながりをさします。保育園ではこの「ともいき」のもとで保育の中で人と人とのつながりを大切にし、仏法僧の三宝「明るく・正しく・仲よく」を基本として、共に思いやり、育ち合うことを目指しております。

また、室内は落ち着いた空間色調で統一され、子どもたちがゆったりくつろげる空間で構成されています。そして木材を多く使用していることから木のぬくもりとあたたかい雰囲気で過ごすことができるようになっています。

どうぞお近くにお寄りの際はご覧になっていただければと思います。

## 施設の概要

- **施設名** 啓明ともいき保育園
- **場　所** 〒064-0914　札幌市中央区南14条西18丁目6-5
- **開園日** 平成26年12月1日(月)
- **定　員** 90人／乳幼児併設(生後5か月から就学前まで)
- **開園時間** 月曜日～土曜日　7時～18時
- **特別保育事業** 延長保育(18時～19時)・一時保育
- **建物の構造** 鉄筋コンクリート造2階建(冷暖房完備)
- **給　食** 園で安全な食事を提供(アレルギー食対応可)

**連絡先**
社会福祉法人札幌慈啓会　啓明ともいき保育園
TEL 011-561-5151　E-mail：tomoiki@sapporojikeikai.or.jp

## お寺の額縁を紹介します①

今号から数回に分けて、アンケートでかねてより要望がありました新善光寺で飾っている額縁について紹介したいと思います。普段何気なく通り過ぎているかもしれませんが、どうぞお参りの際はご覧になっていただければと思います。

### 1 廣度書院（こうどしょいん）

新善光寺の正式な名称は「北縁山（ほくえんざん）廣度院（こうどいん）　新善光寺（しんぜんこうじ）」です。山号・院号・寺号で形成されています。北縁はこの寺報の名称ですから馴染みがあるかと思います。大本山の増上寺は「三縁山　廣度院　増上寺」です。増上寺とのご縁が深いことがこのことからも推測されます。ちなみに総本山知恩院は「華頂山　知恩教院　大谷寺」です。

こちらの額は、神谷大周（かみやたいしゅう）師の筆です。お彼岸やお盆法要の時に受付をしている「月影の間」の外の廊下にかけられています。師は、天保12年（1841）に名古屋で生まれ、東京深川の霊巌寺の住職、京都・清浄華院、浅草の幡随院（現在は小金井市）などの住職を勤め、大正9年（1920）80歳で往生しました。

「廣度（こうど）」とは、廣（広）く度（わた）すと読み、阿弥陀さまのすべての人を救いたいという広大な願いによって、私たちが造る罪の軽重を問わず、迷いの世界を越えて、極楽浄土へと度（わた）してくださるという意味です。その阿弥陀さまを礼拝し、お念仏申す、書院造りのお部屋ということです。

また、この神谷大周師の書は、当山の古くからのお檀家さまのお宅にも数点拝見することがあります。

### 2 演大光（えんだいこう）

当寺の玄関を入り、本堂に上がるとき左側を見ると、この「演大光（えんだいこう）」と書かれた大きな額が掲げられています。こちらは、山下現有（やましたげんゆう）上人のご染筆です。上人は、天保3年（1832）尾張国（現在の愛知県）に生まれ、明治20年に百万遍知恩寺（京都）の法主、明治30年に芝・増上寺（東京）法主、明治35年には知恩院（京都）七十九世となり、浄土門主となられ、昭和9年（1934）103歳で往生されました。

「演大光」とは、大光（だいこう）を演（の）ぶと読み、阿弥陀さまが私たちの心の闇を消すべく、大いなる光を放ってくださっていることを示しています。この言葉は、『無量寿経（むりょうじゅきょう）』の四誓偈（しせいげ）という部分のなかに出てきます。四誓偈は、月命日のお参りなどで最もよく耳にするお経の一つです。

昭和初期ころの写真を見ると、この額は、札幌養老院（現　慈啓会）に飾られていた時もあったようです。

# 北縁　なんでもＱ＆Ａ

**Ｑ：春のお彼岸と秋のお彼岸に関して由来など教えてください（白石区のお檀家様）**

Ａ：彼岸は日本独自の仏事であり、聖徳太子の時代から行われていたと言われています。彼岸は「到彼岸」の略で、「春分・秋分の日」を中日として前後３日ずつ計一週間（７日間）の事を言います。到彼岸は「覚りに至る」という意味で、もともとは仏教語「波羅密（パーラミーター）」の意訳と言われています。俗的には、お中日は先祖に感謝し、残る６日は、悟りの境地に達するのに必要な６つの徳目「六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六つ）」を１日に１つずつ修める日とされています。この徳目を簡単に言うと、布施は「ほどこし」、持戒は「つつしみ」、忍辱は「しのぶ」、精進は「はげむ」、禅定は「心身を静める」、智慧は「まなぶ」といった所でしょうか。

それではここで、浄土宗のお彼岸についてお答えしていきたいと思います。

私達浄土宗の仏様は「阿弥陀如来」であり阿弥陀様のお浄土は「西方極楽世界」です。教えには「春分・秋分の日は太陽が真西に沈み、その方角にはまさしく西方浄土がある。それ故、彼岸の中日には沈む太陽を拝し、遥かなる西方浄土に思いをはせるのに適している。」とあります（これを日想観といいます）。お彼岸にはお墓参りをして、ご先祖様をご供養する習慣がありますが、真西にある西方浄土にいらっしゃる先立たれた方々に思いをはせるという意味になるのです。

## しろいし幼稚園から

2015年の始まりです。幼稚園の一年は、冬休み中の行事として毎年１月７日に行われる『新年お楽しみ会』からスタートします。お正月の遊びに触れ楽しむ事をねらいとし、こま回しやけん玉、すごろくやカルタ等にチャレンジします。普段の保育の中でも行っている遊びですが、久しぶりに夢中になっている園児のお顔は真剣そのものです。特にこま回しは根気が必要で、数えきれない位挑戦して見事に回せるようになった名人もいます。何事にも『やる気』が芽生えなければ達成出来ませんが、年長さんは小さい子のお手本となり、年中さんと年少さんはお兄さんやお姉さんの事をヒーローの様な眼差しで見ていました。お正月遊びに関わらず昔からの伝承遊びはいろいろとありますが、私たち職員も子供時代を思い出しながらその楽しさを園児に伝えていこうと思っています。

さて、全園児が揃ってからは『お楽しみ会』が行われました。仏教幼稚園ですから、まず手を合わせ心の中でのさまとお約束をします。そして、新年のご挨拶をした後は、お楽しみの全体会がスタート。毎年催し物は異なりますが、クラス対抗すごろく大会や先生方による十二支のお話の劇、今年はパネルシアターを通しておせち料理に込められた意味を知る事が出来ました。

今年も、幸せがいっぱいの一年になりますように…

（しろいし幼稚園　主任　後藤美紀）

**新善光寺学園　しろいし幼稚園**
札幌市白石区平和通１丁目南 6-16　☎ 011-861-4426　Fax 011-866-0707
URL：http://www.ans.co.jp/k/siroisi/　Email：siroisi.-pippara@cyber.ocn.ne.jp

# 笑顔に勝る化粧なし

笑顔は、人の心を和ませます。笑顔になっている人も、その笑顔を見た人も共に……。悲しく、苦しい時、ふとお仏壇を拝むと、いつも和やかなお顔の阿弥陀さまに気づくことがあります。

『無量寿経』（巻上）というお経のなかに、「和顔愛語」という言葉があります。この言葉は、阿弥陀さまが仏さまになる前、つまり覚りをひらかれる前の姿を表したものです。**和**やかな**顔**で、慈**愛**あふれる言**語**をもって人々を教え導いているお姿です。いつも笑顔であったともいえるでしょうか。この「和顔愛語」という言葉の前には、「衆苦を計らず」とあります。この時の阿弥陀さまは、さまざまな苦しみはあったけれども、その苦をものともせず、いつも笑顔で人々を導いておられたというのです。多くの苦しみや悲しみを知っていればこそ、人々を救うことができたのかもしれません。阿弥陀さまの笑顔は、多くの苦しみや悲しみに裏打ちされた偽りのない真実の笑顔ではないでしょうか。

今、仏さまとなられた阿弥陀さまの私たちを慈しむ笑顔に包まれながら、また私たち自身も少しでも笑顔の多い一年でありますよう、お念仏の日暮らしを送りたいものです。

〈東京別院・霊源寺より〉
品川区にある霊源寺は新善光寺住職が兼務しており、春・秋彼岸には法要も行なっております。東京近郊でご供養（お葬式・納骨・法事など）をお考えの方はご連絡ください。

## 編集後記

明けましておめでとうございます、本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

号を重ねる事に書きたいことや載せたいことが増えてきて、今号は今までで最多の 20 ページ構成となっております。また使い勝手を考え、年間行事予定を別紙にしました、どうぞご活用いただければ幸いです。

表紙の写真は 4 月に団体参拝旅行で行きます松本城で撮りました。新年らしい写真ではないでしょうか。

Q&Aでは皆様から送られてきたアンケートハガキの質問に答えております。ご質問やご意見など、どんどん書いて送って下さればありがたいです。

次号は 5 月初旬発行予定です。それまでは、ホームページやブログで情報を更新していきます。 新善光寺 検索 （海）

新善光寺寺報
Hokuen 28
北縁

発行／2015 年 1 月発行
発行責任者／新善光寺住職 太田眞琴

〒 064-0806 札幌市中央区南 6 条西 1 丁目 ［TEL］011-511-0262 ［FAX］011-511-4706
［ホームページ］http://s-zenkoj.com ［Eメール］s-zenkoj@crux.ocn.ne.jp